

## [特別活動]

## 学級会における合意形成を図る力の育成 - ガイダンスの充実とルーブリック評価の活用を通して -

本宮佑二郎\*

### 1 問題の所在

変化の激しい社会、グローバル化する社会では、文化的な寛容さを持ち、人々の多様性を尊重しながら、共生していくことが求められる。共生を目指す社会の中では、互いの考え方や関心、意見の違いを理解し、互いを認め合い、互いのよさを生かすような合意形成を図る力が求められている。小学校学習指導要領（平成29年告示）の解説特別活動編においても、育成すべき資質・能力である「思考力・判断力・表現力等の育成」において、「集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。」と示され、他者と合意形成を図ることを目指している。杉田（2017）は、合意形成を図るための話し合いにおいて、児童がそれぞれの学習過程に即した考え方や表現等ができるようにするため、以下のような視点での指導の工夫が必要だとしている。

- ・「出し合う」⇒自分の考えを根拠や理由を分かりやすく表現すること。
- ・「比べ合う」⇒多様な意見の共通点や相違点を共感的に理解し、建設的に考え、質問や意見などを表現すること。
- ・「まとめる」⇒条件付き賛成や折衷案などの折り合うための考え方、「文殊の知恵」のような生産的な考え方をすることや相手の立場を考慮した表現をすること。

これら3つの指導の視点を参考にし、これまで筆者は学級会において話し合いのめあてを設定させることと、その話し合いのめあてを達成できた児童の姿を学級会の終わりに紹介することで、合意形成するためのよりよい姿、言い換えれば合意形成の回り方を児童と共通理解できるようにしてきた。しかし、児童は合意形成の回り方を次時での学級会においては意識するものの、その次の学級会や学級会以外の場面で意識することには至らなかった。筆者の手立ての問題点は、目指すべき合意形成の回り方が教師からの一方的な指導になっていたため、児童が主体的に合意形成の回り方を意識することができていなかった点である。

そこで、本研究では、適切な時期を考え複数回実践した「ガイダンス」と、継続的な「ルーブリック評価」（振り返り活動）を組み合わせ実践した。2つの実践を組み合わせることによって、児童が学級会において合意形成の回り方について主体的に考え、筆者が定義する合意形成を図る力を育成することができるのではないかと考えた。

### 2 研究の目的

本研究では、学級活動(1)の学級会において、ガイダンスの充実とルーブリックの活用（評価の作成、内容の妥当性を吟味する活動等）により、筆者の定義する合意形成を図る力が高まることを検証する。

—本研究における「合意形成を図る力」を身に付けた児童の姿—

多様な考えを出し合い、自他の意見を尊重しながら折り合いをつけ、学級としての考えを決定していこうとする姿である。さらに、どのように合意形成するのかということに加え、合意形成のよさや効果を実感し、実生活でも生かそうとする姿である。

### 3 研究の内容と分析の方法

#### (1) 学級集団の実態

対象児童は、中規模校（全校児童257名）の第6学年児童23名（男子12名、女子11名）で、筆者が第5・6学年と担

\*新発田市立加治川小学校

任をした学級である。

本学級の児童は、学級会の手順をよく理解しており、スムーズな進行を全体で意識することができる。しかし、令和2年度6月に行った第1回学級会では、自分の意見を正当化しようと、相手の考えを打ち負かせようとする自己中心的な発言が複数の児童で見られた。また、学級会オリエンテーションでは、今までの学級会において、友だちの意見を生かそうとせずに、すぐに多数決で意見をまとめていた、とおおよそ半数以上の児童が発言していた。

## (2) 研究の内容

### ① 一連の学習活動

本実践は、令和2年度（第5学年）6月から令和3年度（第6学年）の7月末の期間で行った。学級会は、令和2年度に13回、令和3年度に4回行い、計17回行った。議題の選定から話し合い、実際の活動とその振り返りという一連の学習過程は、『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）』（2019）を参考に組み組んだ。計17回の議題は、表1のとおりである。

表1 17回の学級会の議題

回数	日付	議題	回数	日付	議題
第1回	6/5	学級の目標を決めよう。	第10回	11/20	お楽しみ会をしよう。
第2回	6/12	会社活動を決めよう。	第11回	1/15	給食準備レベルアップ作戦を考えよう。
第3回	6/26	おにごっこのきまりつくろう。	第12回	2/12	友だちと協力できる遊びをつくろう。
第4回	7/3	クラスの掲示物をアレンジしよう。	第13回	3/2	5年1組ありがとうの会をしよう。
第5回	7/17	お楽しみ会をしよう。	第14回	4/23	学級の目標を決めよう。
第6回	9/11	昼休みの過ごし方を考えよう。	第15回	5/7	運動デーを計画しよう。
第7回	9/25	児童会祭りの出店を成功させよう。	第16回	5/28	お互いを認め合えるイベントを考えよう。
第8回	10/9	出店をパワーアップさせよう。	第17回	6/25	お楽しみ会をしよう。
第9回	10/23	そうじの仕方をパワーアップしよう。			

(※ 第1回から第13回までが第5学年での議題、第14回から第17回は第6学年における議題)

### ② ガイダンスの充実について

ガイダンスとは、集団の全員に対して、必要とされる指導・援助を行うことである。本研究における学級会のガイダンスとは、学級会オリエンテーションと、学級会と実際の活動を結び付けて振り返る活動を指す。児童が合意形成のよさや効果を実感し、主体的に合意形成の図り方を意識することができるようにするため、これらの手立てを講じた。

1つ目は、学級会オリエンテーションの実施である。第1回の学級会后、第5学年6月に学級会オリエンテーションを行った。議題提案の方法、計画委員会の学級会進行の方法を指導するとともに、意見のまとめ方シートを児童に配布した。意見のまとめ

方シートは、杉田（2013）を参考に、筆者が作成した（図1）。学級会で意見をまとめる場面で参考にするように伝え、一つ一つのまとめ方について、具体例を挙げながら説明した。このオリエンテーションを行うことで、児童と教師が合意形成の図り方を共通理解することができると考えた。

2つ目は、話し合いの映像を見ながら、自分たちの合意形成の様子と実際の活動を結び付けて振り返る活動である。第5学年10月と第6学年4月の2回行った。第5学年10月の活動では、第3回と第4回、第6学年4月の活動では、第11回と第13回の学級会を分析した。第3回と第11回の学級会は、2つの意見を合体させる方法、第4回と第13回の学級会は、2つ以上の発想を生かして新しいものをつくる方法で合意形成が行われた。分析では、児童に「まとめる」場面を見せた後、「誰の発言がきっかけで意見をまとめることができたか。」と「このまとめ方をしたことで実際の活動はどんなものになったか。」を考えさせた。児童は、誰の発言がきっかけで意見をまとめることができたか、という質問に対して、「Aさんが意見のまとめ方を提案してくれたおかげで話し合いがまとまった。」「司会がすぐに多数決をしなかった

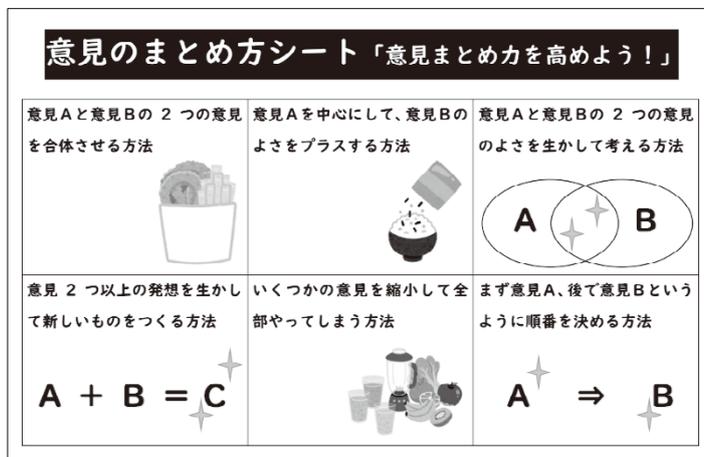


図1 意見のまとめ方シート

のがよかった。」などと発言していた。また、実際の活動については、「意見を合体させると少数意見の人の意見がなくなり、多くの人が楽しめたと思う。」「今までにやったことのない新しい発想だったけど、活動はたくさんの方が楽しめていてうまくいったと思う。」と発言していた。

### ③ ルーブリック評価について

第5学年における第1回学級会を行った後、児童と共同的に学級会のルーブリック作成を行った。三宅・久保田・黒上・岸（2017）は、教師と児童が共同的にルーブリックを作成することについて、「児童はルーブリックを共同的に作成するプロセスを通して、学習目標を意識し、主体的に学習活動に取り組んでいることがわかった。」としている。本研究においても、児童とルーブリック評価の共同的に作成、吟味することにより、児童が学級会に参加する自身の姿について主体的に意識する手立てとなるのではないかと考えた。

令和2年度6月に作成したルーブリックが表2である。「出し合う」、「比べ合う」、「まとめる」の項目は教師側から提示し、第1回学級会での話し合いの姿について意見を出し合った。まず、多くの児童が自分の姿だと感じる項目をB基準にした。その際、教師側の願いを児童へ伝えた。教師の願いが反映されている部分は、「比べ合う」の内容である。児童が他者の考えを共感的に受け止めるために、赤坂（2014）のクラス会議における「安心して話し合うためのルール」を参考にし、ルールの内容を組み込んだ。次に、よりよい話し合いの姿について考えを出し合い、A基準を作成した。基準を作成した後、一部の児童から、それぞれの項目に名前を付けよう、という提案があり、「発信力」、「友だち尊重力」、「考えまとめ力」とした。

表2 令和2年度6月に作成したルーブリック

	A	B	C
発信力 (出し合う)	理由とともに自分の考えを伝えることができた。	自分の考えを伝えることができた。	事前に自分の意見をもつことができた。
友だち尊重力 (比べ合う)	友だちの考えを自分の考えと比べながら聞くことができた。	うなずいたり、あいづちを打ったりして話を聞くことができた。	友だちの方向を見て話を聞くことができた。
考えまとめ力 (まとめる)	多くの人が納得できるようなまとめ方を考えた。	すぐに多数決をとらず考えをまとめた。	多数決をして考えをまとめた。

6月作成のルーブリック（表2）を活用し、第2回学級会から第7回学級会の計6回、学級会の振り返りをした。10月、国語科「よりよい学校生活のために」という単元において、話し合い活動について学び、ルーブリックの評価内容を吟味し、見直す授業を実践した。まず、今まで蓄積していた振り返り用紙を見ながら、新しくS評価を設定するとしたら、どんな内容が良いかを個人で考えさせた。その後、グループになって考え、学級全体でグループの考えを共有した。計6グループから出された考えを板書する中で、「質問」、「少数意見」、「全員が納得」という言葉がキーワードであるという意見が挙がり、それらを生かしてS評価を設定した（表3）。

表3 令和2年度10月に改善したルーブリック

	S	A	B	C
発信力 (出し合う)	友だちの考えに質問したり、付け加えて意見したりすることができた。	理由や根拠とともに自分の考えを伝えることができた。	自分の考えを伝えることができた。	事前に自分の意見をもつことができた。
友だち尊重力 (比べ合う)	少数意見や自分とちがう考えを聞いて話し合いに生かすことができた。	友だちの考えを自分の考えと比べながら聞くことができた。	うなずいたり、あいづちを打ったりして話を聞くことができた。	友だちの方向を見て話を聞くことができた。
考えまとめ力 (まとめる)	みんなが納得できるようなまとめ方を最後まで考えた。	多くの人が納得できるようなまとめ方を考えた。	すぐに多数決をとらず考えをまとめた。	多数決をして考えをまとめた。

改善したルーブリック（表3）は、第8回学級会から第17回学級会の計10回、振り返りに活用した。

### (3) 分析の方法

#### ① ルーブリック自己評価結果の量的変容、映像分析と自己評価による質的変容

計17回の内、第2、7、8、13、17回（ルーブリックの活用とガイダンスの実践後）の振り返りの結果をまとめ、長期的な結果の傾向を分析する。この5回の結果を扱う理由は、ルーブリックの内容を吟味する活動を第7回の後に実施し、合意形成の様子と実際の活動を結び付けて振り返るガイダンスを第7、13回の後に実施したためである。また、実際の話合い（ビデオカメラで撮影した第13、16回学級会）の様子と児童のルーブリック評価の自己評価を照らし合わせ、児童が具体的にどのような場面で合意形成の図り方を意識することに至ったかを分析する。

#### ② 学級会アンケート結果の量的変容と抽出児による質的変容

9つのアンケート項目（表8）と学級会における学びを記述式で計3回（1回目：第5学年9月、2回目：第5学年3月、3回目：第6学年7月）実施した。自由記述は、「学級会で学んだことや、自分たちのクラスの学級会のよさは何だろう。」という題で行った。自由記述式のアンケートでは、第5学年9月のアンケートで、学級会での話合いは好きであるという項目は肯定的だが、学級会で身に付けた力を学級会以外の場面で活用しているという項目が否定的であったC児（男子児童）とD児（女子児童）2名を抽出し、記述内容を分析する。

①②の方法で、本研究の目的に対し質問紙法、児童の発言、行動、観察等による量的変容と質的変容を分析することで、児童が合意形成を図る力を身に付けるために本研究が有効であったかを考察する。

## 4 結果の分析・考察

### (1) ルーブリック自己評価結果の量的変容、映像分析と自己評価による質的変容

表4・5・6の結果から、「出し合う」、「比べ合う」、「まとめる」、全ての観点において、よりよい評価へ人数が増加したことが分かる。表にはない第3回から第6回、第9回から第13回においても多少の上下の変動がありつつも、少しずつよりよい自己評価をする児童が増えた。

第7、13回の後に実施した合意形成の様子を実際の活動と結び付けて振り返るガイダンスでは、実際の活動の充実感を学級会の「まとめる」場面と結び付けて発言する児童が複数いた。これは、ルーブリックの内容にある合意形成の図り方のよさや効果を実感している姿だとと言える。

第13回の議題「5年1組ありがとうの会を開こう」は、1年間の学級の友だちへの感謝の気持ちを感じながら協力できる集会活動をしたいという願いから提案された。

この学級会の「比べ合う」話合いでは、各意見の心配な点を考え、その解決策について話し合った。「まとめる」話合いにおいては、A児の発言をきっかけとし、少数意見を生かすような合意形成が見られた。表7は、投票を行った後の場面である。ドッジボールを選んでいる4人は、フリスビーを投げることが苦手でであり、ドッジボールをしたいと考えていた。そのような場面でA児がした提案は、ルーブリックの「まとめる」のS評価の姿であると言える。A児の提案がされた後、A児の提案

表7 第13回学級会「まとめる」話合いの発言記録（一部抜粋）

司会：多数決で、ドッジボール4人、ドッチビー18人と決定しましたが…。  
A児：ドッチビーで使うボール、フリスビーは時間差で決めるとよいと思います。  
B児：Aさんの意見は、ドッチボールを選んだ人も楽しめると思うので、時間で分けるのは賛成です。

表4 「出し合う」の結果（単位：人）

	第2回	第7回	第8回	第13回	第17回
S評価			4	8	10
A評価	6	12	11	12	11
B評価	14	10	6	3	2
C評価	3	1	2	0	0

表5 「比べ合う」の結果（単位：人）

	第2回	第7回	第8回	第13回	第17回
S評価			3	8	8
A評価	10	11	11	12	15
B評価	7	10	7	3	0
C評価	6	2	2	0	0

表6 「まとめる」の結果（単位：人）

	第2回	第7回	第8回	第13回	第17回
S評価			7	6	9
A評価	7	10	10	11	10
B評価	13	10	6	6	4
C評価	3	3	0	0	0

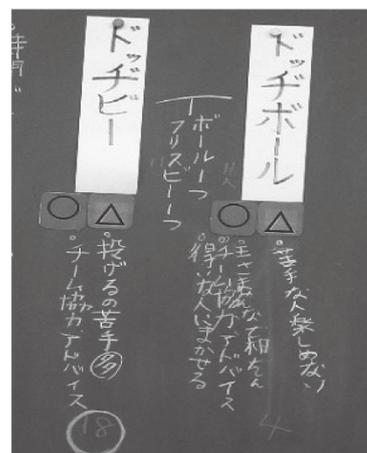


写真 「比べ合う」話合いの板書

を後押しするようなB児たちの意見が出され、2つの遊びを時間差で分けてどちらも行うということで話し合いがまとまった。A児は、第12回までのループリック自己評価では、「まとめる」の項目をA評価にしていたが、この第13回の自己評価はS評価だった。A児が話し合いの「まとめる」場面において、よりよい合意形成の回り方を意識した場面だと考えられる。

表8 第16回学級会「まとめる」話し合いの発言記録（一部抜粋）

司会：よいところメッセージの工夫は3つの候補が出ましたが、どうやってまとめるとよいですか。
C児：はい、3つの候補を1つに絞るのではなく、1学期、2学期、3学期と1つずつやって全てやるといいと思いました。
司会：やる順番を決めるってことですか。

第16回の議題「お互いを認め合えるイベントを考えよう」では、友だちのよいところを伝えるよいところメッセージの工夫について話し合った。

表8は、3つの候補が挙がった後に、司会が多数決以外の方法でまとめようとし、児童全員に意見を求めた場面である。その後、C児が提案した「順番を決めて全ての提案を行うこと」が全体で

決定した。この学級会の振り返りにおいて、C児は、ループリック自己評価の「まとめる」項目をS評価にしていた。

第13回学級会におけるA児、B児、第16回学級会におけるC児は、本研究における合意形成を図る力の「自他の意見を尊重しながら折り合いを付けようとする姿」の部分と合致していると言える。

## (2) 学級会アンケート結果の量的変容と抽出児による質的変容

学級会アンケートの回答は、4件法（4：とても思う、3：まあまあ思う、2：あまり思わない、1：思わない）である。表9と図2の結果は、全児童（23名）の回答の平均値である。図2から計3回の結果を比較すると、全項目において、肯定的な回答が増加した傾向が見られる。質問項目No. 4～6の結果から、学級会においてよりよい合意形成の回り方を活用できていることと、質問項目No. 7～9の結果から、よりよい合意形成の回り方を学級会以外の場面で活用できていることが分かる。また、No. 1～3の項目でも肯定的評価が増加している。学級会における合意形成と実際の活動を結び付けて振り返ることで学級会だけでなく、その後の実際の活動においても充実感を得ることができたと考えられる。

表9 学級会アンケートの結果

No.	質問項目	第5学年 9月	第5学年 3月	第6学年 7月
1	学級会でみんなと話し合うことは好きだと感じる。	3.35	3.43	3.61
2	自分のクラスは自分たちで問題解決することができるクラスだと感じる。	3.17	3.26	3.65
3	学級会で話し合い、実行したことはうまくいったと感じる。	3.39	3.47	3.70
4	学級会をすることで、自分の「発信力」は高まったと感じる。	3.09	3.22	3.43
5	学級会をすることで、自分の「友だち尊重力」は高まったと感じる。	3.17	3.17	3.39
6	学級会をすることで、自分の「意見まとめ力」は高まったと感じる。	2.78	3.13	3.22
7	「発信力」を学級会以外の場面でも使うことができています。	3.09	3.17	3.35
8	「友だち尊重力」を学級会以外の場面でも使うことができています。	3.00	3.04	3.22
9	「意見まとめ力」を学級会以外の場面でも使うことができています。	2.85	3.09	3.26

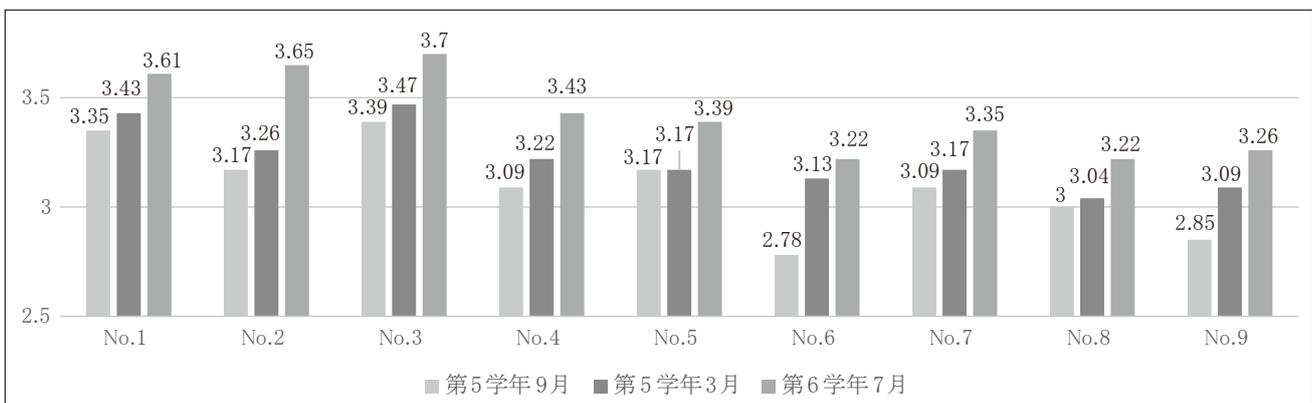


図2 学級会アンケートの結果（グラフ）

以下は、第6学年7月実施のC児とD児の記述式アンケートの内容である。

- C児「2つ以上の意見があるときは、2つの意見をおりませたり、次の時間にやるというようにしたりすると、友だち尊重力は高まると思う。(中略)意見は、質問や反対の意見だけを言うのではなくて、その解決策をいっしょに伝えると、よりよく意見がまとまると思う。みんなで決めたインサイダーゲーム、すごく楽しかったので大成功!」
- D児「クラス会議で他の人の考えに共感したり、うなずいたりすることが増えたように思います。自分の考えと一緒に理由や根拠は、うまく伝えることができなかったけど、自分の考えは言うことができたのでよかったです。また、クラス会議をすることで、自分の考えを少しずつ友だちに伝えることができるようになってきたかな?と思います。」
- ※下線部は筆者

下線部より、C児、D児ともに自分自身の話し合いへの参加をルーブリックの内容と関連させて自己評価していることが分かる。また、C児は、みんなで決定したお楽しみ会のゲームの楽しさについて記述しており、学級会における合意形成のよさについて述べている。D児は、学級会をきっかけに自分の考えを伝えることができるようになってきたことが記述されており、学級会での学びを他の場面と関連付けている。

## 5 研究のまとめと今後の課題

ガイダンスを充実させることとルーブリック評価を教師と児童が共同的に作成、吟味する実践を組み合わせることで、教師主導の評価ではなく、児童が主体的に合意形成を図る自らの姿を評価することができたと考える。ガイダンスの充実と、ルーブリックを用いて学級会の振り返りとルーブリックの吟味を継続していくことが筆者の定義する合意形成を図る力の育成に一定の効果があつたと推察される。

ガイダンスの学級会オリエンテーションにおいて、児童は合意形成のよりよい方法を知ることができた。また、実際の活動と結びつけて合意形成を図るための姿を振り返る活動は、合意形成することのよさや効果を実感することにおいて有効であったと考える。振り返りを行う際には、合意形成に至る過程での効果的な児童の発言について考えさせることで、児童同士が学級会での姿を認め合う姿が見られた。このような合意形成の図り方について学ぶことや学級会の様子を児童同士が肯定的にフィードバックすることは、よりよい人間関係の形成にもつながると考える。今後、学級の人間関係の変容についても関連付けて研究していく。

今後の課題として、本研究は、2つの視点で実践を見直すことにより、さらなる発展性があると考えられる。

1つ目は、本研究以外の多様な議題や題材であってもルーブリック評価を活用できるように、汎用性を見直すことである。具体的に、「発信力」は、意見を出し合う場面のみで見取るのではなく、学級会の話し合い全体で見取る必要がある。また、「発信力」における「友だちに質問をする」という内容は、意見を比べ合う場面でも活用されることがある。本実践では、どの場面でどんな合意形成の図り方が活用できるかを児童が意識しやすいように、学習過程ごとに評価項目を設定した。今後、資質・能力ごとに評価項目を見直し、児童の実態に合わせて改善を図り、多様な議題に対応できる評価項目を作成し、学校全体で共有できるルーブリック評価にしていく。

2つ目は、特別活動における話し合い活動を各教科等の系統性や連続性を踏まえて行うことである。本実践では、ルーブリックを吟味する活動を国語科の授業内で行った。合意形成を図る力は、特別活動の時間だけでなく、国語科における話し合い活動や、社会科や総合的な学習の時間のグループ学習などの場面で生かされることが期待される。今後も特別活動における話し合い活動が、どのようにして各教科の話し合いへ生かされていくのか、各教科等での学びがどのようにして特別活動に生かされていくのか、その往還的な関係を明らかにしていく。

## 引用・参考文献

- 赤坂真二『赤坂版「クラス会議」完全マニュアル』ほんの森出版、2014年  
 杉田洋『特別活動の教育技術』小学館、2013年  
 杉田洋『小学校 新学習指導要領の展開 特別活動編』明治図書、2017年  
 三宅貴久子・久保田賢一・黒上春夫・岸磨貴子「教師と児童の共同によるルーブリック作成の意味－第4学年児童のイメージマップ分析から－」『日本教育工学会論文誌』第41号、2017年、221～224 pp  
 文部科学省／国立教育政策研究所 教育課程研究センター『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）』文溪堂、2019年